

青山学院大学 経営工学科

青山学院大学理工学部経営工学科は昭和40年4月に学部の設立と同時に開設され、この3月でちょうど20年の歴史を迎えた。また大学院理工学研究科修士課程は昭和44年4月に、ひきつづいて昭和46年4月に同博士課程が設置され、当時日本ではごく少数の博士課程（経営工学専攻）を置く学科の1つとなった。

設立時、学科の教育目標は技術と経営にわたる問題を総合的に判断・解釈していく専門経営者ないし経営技術者の養成に置かれていたが、学科設立後の20年は折しも情報化社会の展開期にあたり、教育目標はおのずから修正を余儀なくされ、現在は経営技術者とくにシステム技術者の養成に重点が置かれるようになっていく。（卒業生の約75%はシステム技術者として活躍中である）

図は専門教育科目の配置年次、必修・選択必修・選択の区別、週当たりの時間をわかりやすく示したものである。科目間を結ぶ線は左側にある科目が右側にある科目の履修の前提となる場合に引かれているが、これは履修上の絶対的な条件ではない。選択必修科目は用意された32単位中から22単位以上を取得することが卒業要件として課せられているが、それらの科目のいずれを選択するか、またそれらの実際の履修年次は選択科目と同様に学生の判断にまかされている。

当学科のカリキュラムの特徴としては情報処理教育の比重の高さがあげられよう。過去20年間において何度か行なわれたカリキュラムの変更もほとんど情報処理教育の考え方についての変遷を反映したものであったといっ

てよい。十分な情報処理技術の知識を背景として、経営管理システムや生産システム等の企業が必要とするシステムの分析・設計を行なえる技術者の養成をもくろむ当学科にとって、今後も情報処理教育の継続的な検討は避けられないと考えている。

情報処理関係の設備については、幸い昨年の秋にACOS 950をホストコンピュータとする私立大学では最大規模のシステムが既存のシステムに置き換えられ、公開端末室が開設されるとともに各研究室に端末が配置されることにより教育と研究両面でコンピュータの利用環境は格段に改善された。さらに、本年3月に経営工学科の教員と大学院生専用のスーパー・ミニコン Micro VAX II の導入が終り、今年度からメインフレームでは取り扱いにくい人工知能領域の問題の研究に主として使用する

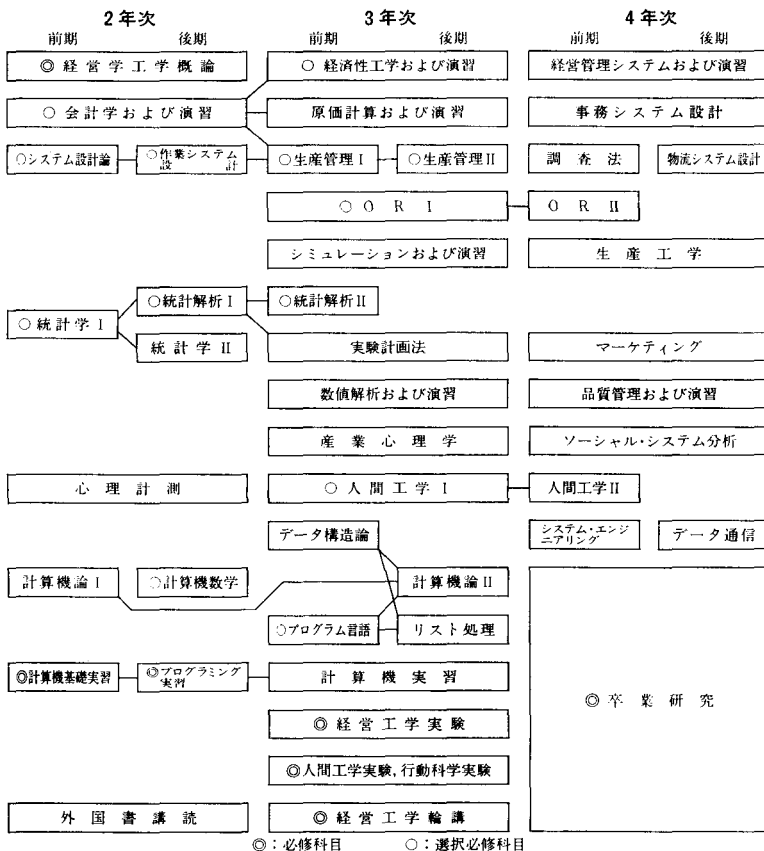


表 1 研究室一覧

研究室名	指導教員
統計学・信頼性工学研究室	阿部 俊一教授 (理博)
システム工学研究室	黒田 充教授 (工博)
事務システム研究室	古谷野英一教授 (工博)
生産システム研究室	佐久間章行教授 (工博)
経営システム研究室	辻 正重教授 (工博)
生体情報学研究室	二宮 理憲教授 (医博)
情報工学研究室	間野浩太郎教授 (工博)
管理システム研究室	田部 勉助教授 (工博)
経営科学研究室	豊田 吉頭助教授 (工博)
人間工学研究室	矢頭収介専任講師 (工修)

ことになっている。

多くの他大学の経営工学科と同様、当学科の教員も卒業研究の指導には情熱をもやし、精一杯時間を費やしている。学生は本人の志望にもとづいて表1に示す研究室のいずれかに所属し、それぞれの指導教員の下で1年間研究を行なう。各研究室は卒研生のために、談話や討議のための広いスペース、個人用の机、十分な台数のパーソナル・コンピュータを備えており、ここで学生は指導教員、助手、大学院生との膝を交えての対話を通じて最新の専門的知識はもちろんのこと、研究の進め方、問題解決における研究の重要性、さらに筆者の一方的な期待かもしれないが、研究そのものを尊ぶ心を学ぶ。

表2に昭和59年度の卒業論文および修士論文の研究テーマの分布を示した。ORの手法と応用に分類される研究テーマは全体の約3分の1を占め、これに統計的方法と統計解析に分類されるテーマさらにシステムとソフトウェアの開発の分類中に見いだされるパターン認識システム、エキスパートシステム、意思決定支援システムなど広義のORと呼べるテーマを合わせるとその合計は総数の半分以上を超え、経営工学領域の研究においてやはりORが大きな役割を演じていることがわかる。

設備、予算、その他の面で設立当初からめぐまれ、順調に発展してきた当学科ではあるが、今後果たさねばならない課題も決して少なくはない。なかでも大きな課題は大学院の充実であると考えている。本年3月までの修士課程終了者は72名、博士課程終了者(学位取得者)は1名をようやく数えるのみであり、一部の大学のそれに比べれば大いに見劣りする。しかし、経営工学専攻の教

表 2 研究テーマの分布(昭和59年度卒論および修論)

領域	論文数	百分率 ^{0/0}
統計的方法と統計解析	8	12.9
ORの手法と応用	21	33.9
システムとソフトウェアの開発	21	33.9
メカトロニクス関係	4	6.4
人間工学	7	11.3
その他	1	1.6

員にとっての最大の関心事はそれより学生はもちろんのこと社会とくに企業から見て魅力のある大学院をいかにすれば築き上げられるかという点にある。それには私学の大学院であるがための問題、つまり教員の担当時間や授業料に関する問題などを大学レベルで解決していかなければならないこともあるが、大切なのは経営工学領域の研究は単に学問的な興味を満たすものに終わってはならないという姿勢を堅持することであると思われる。現実問題の解決に本当に役立ちかつ汎用性のある管理技術やシステム技術が絶えず生み出される大学院、創造力をもって現実の問題解決に当たれる人材を送り出せる大学院、これがわれわれの理想の大学院である。そのような大学院をもってこそ、経営工学科としてのこの現代社会における確固たる存在意義も生れてくるように思えるのである。(黒田 充)

●ご利用ください●さしあげます●

下記の雑誌は交換等によって日本OR学会にはほぼ定期的に送られてきているものです。学会事務局で保管しておりますので、どうぞご利用ください。下記のもの以外にも大学の論叢等があります。なお1985年中に発行のものは、ご希望があればさしあげますので(原則としては郵送はいたしません)事務局までお申し出ください。(会員の方を優先とさせていただきます。)

- | | |
|--------------|--------------|
| (1)運輸と経済 | (9)テレトピア |
| (2)ENGINEERS | (10)電子通信学会誌 |
| (3)技術と経済 | (11)土木学会誌 |
| (4)JMAジャーナル | (12)日本機械学会誌 |
| (5)計測と制御 | (13)標準化ジャーナル |
| (6)高速道路と自動車 | (14)標準化と品質管理 |
| (7)産業能率 | (15)理論経済学 |
| (8)数理科学 | |